

岡山188cm望遠鏡の 共同利用の変遷

スクリーニング制とプロジェクト制



定 金 晃 三（大阪教育大学）
プログラム小委員会委員長
（任期：1998 - 2001）

1．旧き良き時代

30歳代以下の岡山ユーザーには信じられないことかも知れないが、かつて岡山188cm望遠鏡は申し込みを出せば、ほぼ確実に何日かの観測時間が得られる時代があった。観測所が動き出した1960年代には（その頃活躍した人はほとんど引退したので、今から思えば神代の時代か）、観測申し込みをする人も少なく、面倒な調整をする必要も無くて平穏な時代だったようだ。筆者が観測を始めた1970年代の前半には、人数が増えて来たからか、申し込みを出す前に各機関で調整をする『自主規制』が行われていた。当時の申し込みは年一回で、集まった申し込みは東京天文台で『プログラム相談会』という会合で割り付けの案が作成されていた。このやり方はよほどのことが無い限り、申し込みを断ることはせず、込み合った場合には夜数を少なくする事で収めるという方法が取られていた。1980年代に入ると銀河の観測を希望する研究者が増え、必然的に特定の季節の暗夜に希望が集中する現象が起きてきた。はなはだしい場合には、2ないし3夜の観測ということも起きるようになった*。ところが、岡山の天気では、このような短期間ではせっかく行っても手ぶらで帰ることが珍しくなくなり、研究者のフラストレーションが高まった。

2．長い議論

そこで、1980年代になるとユーザーズミーティング（UM）の度毎に、この現状をなんとか打開しなくては、という議論が行われた**。いろいろな議論はあったが、要約すれば、(1)シビルミニマム論と(2)共倒れ防止論の対立であったと見る事ができる。(1)の論拠は、岡山188cmというものは国内の研究者がアクセスできる唯一の本格的設備であるから、皆でチャンスを分け合って機会を保証するべきであるという事で、始めはこの考えが強かったように思う。これに対して、(2)を主張する人は、今までのやり方では誰もまともな成果を挙げられなくなる（共倒れ）のおそれがあるので、なんらかの方法で課題を選択

編集者注： * ...P186にスクリーニング制導入直前（1988年）の観測日程表が示されている

* * ...P195にスクリーニング制導入に関する議論の資料が示されている

し、一流の成果を挙げられる仕組みを導入する事を求めた。どちらにも一応の説得力があったので、議論は容易には収束しなかった。同じ頃、次期大型望遠鏡計画（当時はJNLTと称していた）の議論も進みつつあり、1980年代の後半に入ると東京天文台の改組が日程に登るようになった。そのような中で、岡山の観測プログラムについては、まず年2期制の導入が決まり（86年11月）2年後には、スクリーニング制を取り入れて188cm望遠鏡の観測は5ないし6夜程度を単位としてプログラムを作成するという方向が固まった（88年10月）。この間、国立天文台が発足し（88年7月）それに伴ってプログラム相談会に代わるプログラム小委員会が活動を始めた。レフェリーに依頼してプロポーザルの評価をしてもらい、それに基いて採否を決めるスクリーニング制の実際の適用は89年後期に始めて行われた。

3．スクリーニング制の功罪

以来約12年間スクリーニング制による運用が続いているが、果たしてこのやり方は岡山で一流の成果を挙げるという目標を達しているのだろうか？観測プログラムの平均夜数を5ないし6夜程度にするという基準は、ほぼ厳格に守られており、何のデータも持たずに帰るというケースはほとんど無いと聞く。一方、その裏には何回も採択されない事が続いて、岡山188cmでの観測を止めてしまった（止めざるを得なかった）研究者もいることは事実である。観測天文学研究のすそ野を堅実に拡大するには、スクリーニング制をやっているだけでは駄目で、使える望遠鏡時間を増やす以外に本質的な解決策は無いこと

は自明であろう。その点で2000年から始まったすばる望遠鏡の共同利用は、岡山188cmの使い方にも根本的な転機をもたらすと考えられる。

4．プロジェクト制の導入と今後

1995年頃になると、世界的に2m級の望遠鏡の使い方が変わってきたことが認識され始めた。それは、3ないし4m級の上にケック望遠鏡のような大型装置が稼動し始め、2m級の望遠鏡は長時間占有してプロジェクト的な観測で基礎データを得ることが主流になってきたからである。岡山観測所のUMでも何度かそのことが提起されたが、時期尚早ということではなかなか日の目を見なかった。筆者がプログラム小委員長になった1998年のUMでプロジェクト制の導入を提起し、議論のすえ一年後のUMで具体的な要項の案を提示することになった。1999年のUMで提案した要項案が一応承認され、2000年前期からプロジェクト観測の申し込みを受け付けることになった。これが実現した背景には、2000年9月からすばるの共同利用が始まることへの期待があったことはもちろんである。現在のプロジェクト制はかなり制限のきつい状態（たとえば、共同利用時間の20%を超えないという枠がある）で運用されているが、近い将来現行の要項は見直しを迫られるだろう。現在岡山観測所のあり方そのものが問われる状況が生じている。すばるの時代に観測天文学の基盤をしっかりとしたものにするために、国内の観測施設の担う役割はどうあるべきか、また、国立天文台と大学はどのように連携していくのが良いか、そのような問題が今問われている。